

# 文化五年十月十七日(1808.12.4)四国・紀伊半島で記録された小津波

東京大学地震研究所\* 伊藤 純一

## A Small Tsunami of December 4, 1808 (5th Year of Bunka) Recorded on the Coastal Areas of Shikoku and the Kii-Peninsula

Junichi ITO

Earthquake Research Institute, the University of Tokyo,  
1-1-1 Yayoi, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0032 Japan

Abnormal sea level oscillation was recorded at several places on the coastal areas of the Kii Peninsula and Shikoku Island on December 4, 1808. Late at the previous night, earthquakes felt twice at these areas and additionally at Osaka and Tottori. One broke out at about 10 p.m., and the other after midnight. No abnormal meteorological phenomenon such as storm was recorded on diaries kept at many places in Japan in those days, which suggests that this oscillation was caused by a small tsunami. At Tanabe, Mie prefecture, waves came four times from 4 to 9 o'clock in the morning of December 4. Astonished by the sudden abnormal tide, all habitants could hardly sleep a wink till next morning. At Kimoto, Kumano City, Wakayama Prefecture, seawater suddenly rushed upstream into a river from the port at 6 a.m. The river under the bridge was swollen by angry waves. Ships in the port was tossed about and carried away by surge. Sea level oscillation did not cease until early next morning. People kept watching the sea and got ready to escape through the night. In Shikoku, sea level rose up by 5 feet at Fukui village, now belongs to Anan City, Tokushima Prefecture. Visitation of tsunami at Kannoura, Tanezaki and the port of Tei, near Akaoka town, Kochi Prefecture, were recorded in the diary at Akaoka. On the basis of these tsunami and earthquake records, the source area of the Bunka tsunami is estimated to be several tens of kilometers west of that of the Offshore Southeast of the Kii Peninsula Earthquake (M7.4), on September 5, 2004. Depending chiefly on tsunami data, the magnitude of the Bunka earthquake is estimated to be about the same size as this earthquake. However, seismic intensity of the Bunka earthquake is much smaller than the 2004 event especially in densely populated Kinki area. The contrast between tsunami data and seismic intensity data suggests that the 1808 Bunka Earthquake was a so-called "tsunami earthquake" like the Keicho Nankai earthquake of 1605.

### §1. はじめに

文化五年十月十七日(1808年12月4日)に、紀伊半島南部から四国の阿波・土佐にかけての沿岸で、異常な潮の差し引きが見られた。前日の晩と夜半には、これらの地域に加えて、鳥取・大坂でも地震を感じた。現在迄に知られている海外の遠地津波のリスト[Solov'iev and Go(1984)]にはこれに該当するものは無く、この前後の日本各地の天候や潮流・海況の記録にも原因と見られるような現象は見出されないの、地震による津波と考えることができる。

特に被害が出なかったために被害地震や津波のリストには登場せず、研究者の注意を引くことも無かったが、1981年以降の東京大学地震研究所と宇佐美

(1998年より)による地震史料集刊行の進展の中で次第に集まって来た関係史料を総合してみると、かなり広域の津波を伴った地震であった可能性が強い。

文化5年(1808年)は宝永地震(1707年)の101年後、「安政東海／南海地震」(1854年)の46年前にあたっており、この時期に南海地震の震源域又はその周縁で中規模の津波を伴う地震が発生していたとすれば大変興味深い。

### §2. 史料の概要

この地震と津波に関する史料は『増訂大日本地震史料(第3巻)』、『新収日本地震史料第4巻』、『「日本の歴史地震史料」拾遺 2』に収録されているほか、徳

\* 〒113-0032 東京都文京区弥生 1-1-1

島県の『阿南市史』と『福井村誌』にも記述がある。(地震津波関係史料とその出典は最後にまとめて掲載した。)これらの情報をまとめると表1のようになる

これらのうち、地震と津波の両方について最も明確に記しているのは、紀伊田辺の大庄屋の公的記録『紀州田辺万代記』である。ここには「一、同十七日夜前四ツ時過地震、九ツ時(午前0時頃)大ニ震、家々驚候処、七ツ(午前4時頃)過急ニ汐満・・」と書かれ、17日夜の地震のように読めるが、この文章は17日の津波のことを記した一条として書かれており、地震はその前夜の出来事と見て差し支えないだろう。「新庄浜(和歌山県田辺市新庄町)、敷(敷浦:田辺市湊磯間)、目良村(田辺市元町目良)など様々申出候」とあり、大庄屋の許へ急報が届いていたことがうかがえるが、これらはいずれも田辺湾沿岸の地点である。

紀伊半島南東岸の木本(紀伊国南牟婁郡木本町:現在、三重県熊野市木本)の『復古の綴』には地震のことは記されていないが、卯の刻(午前6時頃)に急に汐が押し寄せて来たさまが具体的に記されている。汐の指し引きが長く続いたのは田辺と同じであるが、木本の場合は「終夜指引止マズ」、翌18日になっても「少々指引、アレテ不静」とある。

原文で「卯時」の卯に？がつけられているのは採録者(武者金吉・吉信英二;昭和17年8月)によるものだが、田辺が「七ツ(寅刻)過」なので、丑・寅・辰・巳や数字ではなく「卯」が正読と思われる。しかし、『復古の綴』の原本は未だ確認できていないので、テキストの記述や地震有感の有無については、今後の原史料搜索及びこの地域での史料蒐集を俟たい。

もう一つの有力史料は、土佐赤岡(高知県香美郡赤岡町)の『隠見雑日記』である。これは、赤岡の富裕な商人、山中駒吉が文化4年から明治2年まで六十余年にわたって書き続けた日記であるが、原本は行方不明となっており、歴史家の寺石正路が明治37年にテーマ別に分類抄録したもののみが残されていて、地震の記事は「天災」の項目に収録されている。原著者は赤岡と高知の両方に邸宅を構えて往来し、もとの日記には記録時の居所が記されていたようであるが、分類抄録版には記されていない。しかし、文化五年の津波記事は、赤岡の東3km余の手結浦(高知県香美郡夜須町手結)の記事が当日に記載され、山地を隔てた高知県南東海岸の甲浦(同安芸郡東洋町甲浦)の記事が種崎村(高知市種崎;浦戸湾口)の記事と共に23日の条に書かれているので、赤岡での

執筆と思われる。23日の条は「巳前の地震甲浦種崎杯(等)浪入」とあるが、「巳」は「巳」の書き誤りと考えられ、この記述は「巳前」すなわち「以前の地震」(16日)についてのものであろう。(土佐郡書集成第44巻の『隠見雑日記』は、手書きの謄写印刷である。)

以上は、既に地震史料集に収録されたものであるが、徳島県の『阿南市史第二巻(近世編)』(1995)に文化五年の地震・津波についての記事が見つかった。後掲の史料集に示したように、この記事は『徳島県那賀郡福井村誌』(1956)の引用である。文化五年の記事は「十月十七日地震潮五尺高く来る」という極めて簡単なものであるが、この記事は「一、文化五年閏六月大風損家倒木あり」に始まる一条の後半である。文化五年閏六月二十九日(1808年8月20日)に、西日本から中部・関東に至る広い地域を暴風雨が襲ったことは事実なので、後半の記事の信憑性も高まる。恐らく、旧福井村の旧家の記録によるものと推定される。(日本の歴史上の暴風雨については例えば、中央気象台・海洋気象台編纂『日本気象史料』第1巻・第3巻参照。「閏」をつけない六月二十九日の暴風を記した史料も多く混乱しているが、閏六月二十九日の風雨は表2で紹介した京都の『二条家内々御番所日記』等にも書かれており、確実である。)

なお、『増訂大日本地震史料 第3巻』p.173の「文化五年閏六月十七日」の阿波の地震・津波の記事は、昭和5年刊の『福井村志』によるものと思われるが、同じ原史料に書かれていた、この条の写し誤りであろう。詳しくは後掲した史料のところに記すことにする。

海の小さな変動が文書や公用日記はもちろん、個人記録に書き留められることも極めて少ない。また、一般に地震史料調査では、著名な大地震の日付後を除き、地震の記事を伴わない「小舟が波でゆらいだ」とだけ書かれたような記事は見過ごされ易い。

### §3. 津波の特徴

地震と津波に関する情報を地図上にまとめたのが図1である。『徳島県那賀郡福井村誌』を除き、波の高さを明記した史料は無いが、紀伊田辺や高知県の手結・種崎・甲浦で少なくとも1m前後、熊野市木本では2m程度に達していたと考えられる。汐に翻弄される舟の記述は2004年9月5日の紀伊半島南東沖(本震の気象庁の呼称は東海道沖)の地震(M7.4)の際に尾鷲や串本の港で起ったことを思い起こさせる。

潮が急に満ちて来たのに気付いたのは、紀伊田辺

では七ツ(午前 4 時頃)過ぎ、熊野市木本では卯時(午前 6 時頃)だったと記されている。旧暦 16 日の夜であるから、晴れていれば日没から日の出まで月の光があった筈ではあるが、新暦なら 12 月上旬の深夜の海面の異変に気付く人は少なかつたろう。また、七つから卯時はちょうど潮が満ちて来る時間である。(南紀白浜の潮位変化を図 2 に示した)。海面の変動が始まったのはもっと早かつた可能性がある。

一方、夜二度目の強い地震を感じたのは、紀伊田辺では「九ツ時」、鳥取では「丑刻(午前 2 時頃)」と記されている。どちらも夜四ツ(亥刻;午後 10 時頃)の地震とまとめて書かれ、後の地震の方が強かつたと記述されているので、同一の地震と考えられる。深夜でもあり地震の時刻は不確実であるが午前 2 時少し前頃なのではないだろうか。そうだとすると、急に汐が満ちて来たことに人々が気付くまで 2~3 時間が経過したことになる。

汐の指し引きが非常に長く続いたのも大きな特徴である。熊野市木本では十七日の日暮れになっていよいよ甚だしくなり、終夜止まず、ようやく二番鶏頃静まったという。あまり長く続いたということになると、地震津波以外の何か別の原因、又は津波に加えての別の要素を考えなければならぬかも知れない。

『紀州田辺万代記』では、七ツ過から五ツ頃まで指引四度とあり、単に「五ツ」と書いてあるので朝の五ツ(午前 8 時頃)と思われるが、木本の記録が事実とすれば、夜の五ツ(午後 8 時頃)なのかも知れない。

津波の襲来した範囲についての判断は難しい。全体に津波の規模は 2004 年 9 月 5 日 23:57 頃の紀伊半島南東沖(東海道沖)地震(M7.4)の際のそれに似ているが、仮に文化 5 年にこの地震が起こつたと想定してみると、震動はともかく、津波についての記録が各地に残る可能性はあまり高くないだろう。串本や尾鷲などで、『隠見雑日記』の記述のような記録が残される可能性がある程度なのではないだろうか。

#### § 4. 津波の前の地震

津波前夜の四ツ時(午後 10 時頃)に地震を感じたことは、紀伊田辺、土佐赤岡、大坂、鳥取の記録に記されているが、その後子~丑の刻により強い地震があったことを書いているのは田辺と鳥取だけである。

一般に、有感地震の記録が未発見であることから直ちに、その地域の揺れは大したことはなかつたと結論づけるのは危険である。西日本の日記調査は充分ではなく、地震も深夜だったので、第二の地震では赤

岡以外の高知県や田辺以外の紀伊半島地域の震度は 3 以下だったと判断するのは尚早であろう。

しかし、記録の多い近畿地方中心部については、有感記録が一件のみという事からこの地域の震度はあまり大きくなかつたと推測しても良いだろう。例えばこの地震の直前、文化五年七月十三日(1808. 9. 3)~十五日に近畿・中部地方で記録された一連の小地震の場合、『増訂大日本地震史料』・『新収日本地震史料』・『日本の歴史地震史料 拾遺』シリーズを合わせると、京都で 7 件、大阪府で 2 件、岐阜県で 2 件、奈良・三重・岐阜・長野各県で各 1 件もの日記類の記事が収録されている。そのうち、「余程の地震」と書かれているのは 2 件だけである。(十三日未明の地震; 京都三井家の『永書』と大阪府池田市の日記)。

2004 年 9 月の紀伊半島南東沖の M7.4 の地震では、大阪府・京都府・滋賀県の中・南部と奈良県の震度は 4 に達した。紀伊田辺地域では 4~3、高知県の高知~赤岡地域の震度は 2~1 であった。鳥取県から兵庫県・京都府の日本海側にかけて所々震度が 4 の地点があつたことは、『因府年表』の記事とあわせて考えると興味深い。

#### § 5. 津波の波源域と震源域

最初に述べたように、遠地津波のカタログにはこの津波に該当するものは無く、西日本の天候は一週間以上安定した状態が続いていた(表 2)。海況について言及した記録は少ないが、今の所この津波自体を除き、文化五年十月に海に何か異常を認めたという記録は見つかっていない。

この津波が南海トラフ系の地震によるものとするれば、波源域は紀伊半島南東沖から紀伊水道沖に至る海域が最も有力であろう。2004 年 9 月の紀伊半島南東沖地震の震源域のような、想定されていた東南海~南海地震の震源域とはやや異なつた周縁部での発生の可能性も含めて、幅広く検討する必要がある。

土佐湾や阿波の橘湾で明瞭な津波が目撃されているのに対し、尾鷲から東では今のところ津波の記録が全く無いことも考慮すれば、文化五年の津波の波源域は、2004 年の地震より数十 km 程度西よりで、大きさはほぼ同程度というのが最も妥当であろう。現在、震源のメカニズムも含めてこの地震の地震像を検討中で、2004 年の地震学会秋季大会で試案を発表した[行谷・他(2004)]。

震度分布を見れば、二度目の強い方の地震にしても 2004 年の地震の足元にも及ばないことは明らかで

ある。史料の多い大坂・京都でも記録が少なく、唯一の記録である三井家の『日録』が、ただ四ツ時の地震を書き留めているのみなので、どちらの地震も、浅い地震だとすれば、震央は紀伊水道かその沖に求めるのが妥当であろう。津波がこれらの地震のどちらかによって引き起こされたのであれば、極めて「津波地震」の色彩が強い地震だったことになる。

## § 6. 文化五年「小南海津波」の謎と慶長南海地震

文化五年十月十六日の津波は、前夜と夜半過ぎの二つの地震の後で襲来した。二度目の地震から、人々が海の異常に気付くまでの時間は紀伊田辺で少なくとも2～3時間、熊野市木本ではそれからさらに2時間近く経ってからのように書かれている。

夜間で気付くのが遅れたにしても、地震からの時間があまりにも長すぎる。もし波源が陸から非常に離れた規模の大きいものであれば、太平洋沿岸のもっと広い範囲で異常が記録されていても不思議ではない。これは、この津波の一つの謎である。これについて、幾つかの解答が考えられる。

①波源域はかなり沖だったのかも知れないが、潮の異常に人々が気付くのが遅かったのが主原因。②津波を引き起こしたのは、陸で感じたのとは別の「津波地震」。③地震により、大規模な海底地滑りなど、特別な現象が誘発されて「津波」が発生した。

日暮れになってもいよいよ激しく、翌日まで波が静まらなかったという『復古の綴』の記事を重視するならば、木本で見られた「津波」には地震による津波以外に別な要素が加わっていた可能性を考えなければならないだろう。はるか沖合いで小型の「津波地震」が連続的に発生したというようことは考え難い。

現時点では、地震による津波とは別の原因の存在を示唆するような史料は何も見つかっていない。

南海トラフ地域の海底地形調査の進展や、新たな遠地津波史資料発見の可能性などには充分注意を払う必要があるが、今の所、地震を第一の原因とする津波と考えるのが最も有力である。

文化五年の地震の想定震源域を含む、より大きな地震と津波が慶長九年十二月十六日(1605年2月3日)に発生していた。「慶長南海・東海地震」である。

この地震では、京都・奈良・大坂などで地震を感じたという確実な記録が無く、「大地震」と書かれている四国でも、震動による被害は知られていない。そのため、「津波地震」の代表例とされる一方、大規模海底地滑りの誘発など、様々な可能性も指摘され、最近で

は安藤・Besana(2004)によって、メタンハイドレート崩壊による津波発生の可能性が議論されている。

文化五年十月の津波が地震によるものであるとすれば、かなり特異な「津波地震」と考えられる。その特異性には「慶長南海地震」と通じるものがあり、通常の南海地震とは異なる「津波地震」発生の方が紀伊水道沖に存在するか、又はある条件の下で発生することを示しているのかも知れない。

## § 7. まとめ

文化五年十月十七日の「小南海地震／津波」は、想定東南海地震の海側で2004年9月5日に発生した紀伊半島南東沖地震との関連で注目されたが、発生の方はこれよりも西にあり、「津波地震」の性格が強い。2004年9月の紀伊半島南東沖の一連の地震でも示されたように、南海トラフ系地震の発生様式が想像以上に多様であることを示すものであろう。

推定地震規模は、紀伊半島南東沖地震の本震とほぼ同等のM7～7<sup>1</sup>/<sub>2</sub>級と考えられ、津波のデータを重視した試算では、図1に示したように、潮岬沖の、東南海地震と南海地震の中間領域に震源域を持ち、規模はM7.6程度という結果が得られた。

古い時代の地震には、熊野の記録にだけ「大地震」と記録されているものがあり、近世に入ると、紀伊半島あるいは高知県で有感だったものの震央のはっきりしない地震が記録に残されている。これらの中には、南海トラフ系巨大地震の発生領域及びその周縁で発生した、ある程度の規模を持った地震も含まれているかも知れない。今後は、特に海の変動の記録に注意しながら史料の収集と分析を行い、その可能性を検討してみたいと考えている。

## 謝辞

史料の調査、検討並びに本稿作成にあたり、東京大学地震研究所の都司嘉宣氏・行谷佑一氏の一方ならぬ御支援を賜りました。また、阿南工業高等専門学校島田富美男先生には『阿南市史』の「北谷繁蔵記録」のコピーをお送りいただきました。記して厚く感謝申し上げます。

## 文 献

(地震史料集に収録済みの地震史料については、最後の史料集にそれぞれの出典を記載した)

阿南市史編さん委員会, 1956, 阿南市史 第二巻

(近世編), 阿南市, 381.

安藤雅孝, G. M Besana, 2004, 1605年慶長地震のメカニズム, 第21回歴史地震研究発表会講演要旨集, 7-8.

中央気象台・海洋気象台(編), 1971, 日本の気象史料, 1(「中央気象台・海洋気象台(編), 1940, 日本気象史料」の復刻), 原書房, 404pp.

中央気象台・海洋気象台(編), 1971, 日本の気象史料, 3(「中央気象台・海洋気象台(編), 1941, 日本気象史料追補2」の復刻), 原書房, 218pp.

原田一二(編・出版), 1956, 徳島県那賀郡福井村誌, 144.

武者金吉, 1941, 増訂大日本地震史料 3, 文部省震災予防評議会, 173-174.

行谷佑一・伊藤純一・都司嘉宣, 2004, 文化五年十月十七日(1808・12・4)四国・紀伊半島の「小南海津波」, 日本地震学会2004年度秋季大会講演予稿集, C070.

Solov'iev, S.L. and Ch. N., Go, Catalogue of tsunamis on the eastern shore of the Pacific Ocean, Nauka Publishing House, (Translated from Russian by the Slavonic Languages Section Translation Bureau, Department of the Secretary of State of Canada, Institute of Ocean Sciences, Department of Fisheries and Oceans, Sidney, B.C., Canada, 1984.)

東京大学地震研究所(編), 1984, 新収日本地震史料, 4, 290. (第1巻刊行は1981年)

宇佐美龍夫, 1998, 「日本の歴史地震史料」拾遺, 512pp.

宇佐美龍夫, 2002, 「日本の歴史地震史料」拾遺, 2, 154-155.

#### 天候の史料として用いた日記類

天草町教育委員会, 1989, 上田宜珍日記 文化5年, 406pp.

慶應義塾大学三田メディアセンター・慶應義塾図書館貴重書室(編・発行), 2001, 江戸・京都の天気表 二条家内々御番所日次記 4, 77.

日光東照宮社務所, 1975, 日光叢書 15, 社家御番所日記文化3年1月～文化11年12月, 761pp.

多賀大社叢書編修委員会, 1978, 多賀大社叢書 記録編二, 多賀大社社務所, 140-148.

表1. 地震・津波に関する情報一覧

◎は「大地震」 ○は単に「地震」と書かれたもの

\*は津波の記事があることを示す

		およそ	紀伊田辺★	熊野市木本	大坂	鳥取	土佐赤岡	土佐甲浦・種崎等	徳島県福井村
10月16日	夜四ツ地震	22時	○		○	○	○		
	夜九ツ時地震	0時	◎九ツ時			◎丑刻(2時)			
	時刻不記載								○
	津波		*	*			*	*	*
17日							手結浦ノ湊へ鈴波入り引汐之時湊ノ舟其汐二ゆるる事、物すさまじき事	已前の地震甲浦種崎等浪入殊外大騒	十月十七日地震潮五尺高く来る
	七ツ過	4時	急二汐満、海近ハ汐入 引てハ指 引てハさし						
	卯時(六ツ)	6時		俄二汐水溢来 湊より大河ノ如ク遡り橋ノ下漲上リ忽引忽満 船漂蕩ス					
	「五ツ」☆	8時	五ツ頃迄四度也						
				日暮弥甚敷、終夜指引止マス					
				漸二番鶏比静り、					
18日				翌十八日モ少々指引、アレテ不静					
出典			田辺万代記(拾遺2)	反古の綴(新収4)	日録(新収4)	因府年表(増訂3)	隠見雑日記(新収4)	隠見雑日記(新収4)	徳島県那賀郡福井村誌

☆夜の五ツならば、20時頃

★新庄はま・敷・目良村など様々申出候

表2. 文化五年十月の各地の天候記録

二条家:「江戸・明治京都の天気表 二条家内々御番所日次記」 多賀大社:「不動院日記」(多賀大社叢書記録編二)[滋賀県犬上郡多賀町] 日光:「社家御番所日記 文化3年1月～文化11年12月」

文化五年戊辰十月小	上田宜珍日記(天草郡高浜村庄屋)(刊本)	新収日本地震史料第4巻より	二条家京都(天気表)	多賀大社滋・多賀町(刊本)	日光御番所日記(刊本)
文化5年1808年					
10月1日 Nov.18	晴天 北風 巳日		晴	晴	雨
10月2日 Nov.19	晴天 北風		晴	晴	晴
10月3日 Nov.20	晴天 北風 平波		晴	晴	晴
10月4日 Nov.21	晴天 北風		晴	晴	晴
10月5日 Nov.22	晴天 北風		晴	晴	晴
10月6日 Nov.23	雨 東南風		晴	晴	晴
10月7日 Nov.24	晴 北風 亥日		晴	晴	晴
10月8日 Nov.25	晴 北風		晴	晴天	晴、風
10月9日 Nov.26	(天候記入なし)		晴	晴	(欠)
10月10日 Nov.27	曇 北風		晴	晴	陰
10月11日 Nov.28	晴天 平波	晴暖(筑後柳川)	晴	晴天	晴
10月12日 Nov.29	晴天 北風		晴	晴天	晴
10月13日 Nov.30	晴 北風		晴	晴天	晴
10月14日 Dec.1	晴曇 北風	天気(大坂三井)	晴	晴	晴、風
10月15日 Dec.2	晴天 北風	朝曇(土佐赤岡)晴天(熊野)	晴	晴	陰
10月16日 Dec.3	晴天 北風		晴	晴	晴、風
10月17日 Dec.4 ←	晴 北風		晴	雨	晴
10月18日 Dec.5			曇	半晴	晴
10月19日 Dec.6	晴天 北風	晴(京都吉田神社)	晴	晴	晴
10月20日 Dec.7	曇天 北風		晴	晴	晴
10月21日 Dec.8	晴天 北風		晴	晴	晴
10月22日 Dec.9	晴天 北風		晴	晴	晴
10月23日 Dec.10	晴 北東風 夜二入暁迄雨		晴	晴	晴
10月24日 Dec.11	晴 北風		雨	雨	曇
10月25日 Dec.12	晴天 北風		晴	雨	晴
10月26日 Dec.13	晴天 北風		晴	雨	晴
10月27日 Dec.14	晴 北風		晴	雨	晴
10月28日 Dec.15	雨天西北風夜九ツ頃より大荒		雨	雨	陰
10月29日 Dec.16	曇 山々雪積 西風		晴	晴	晴

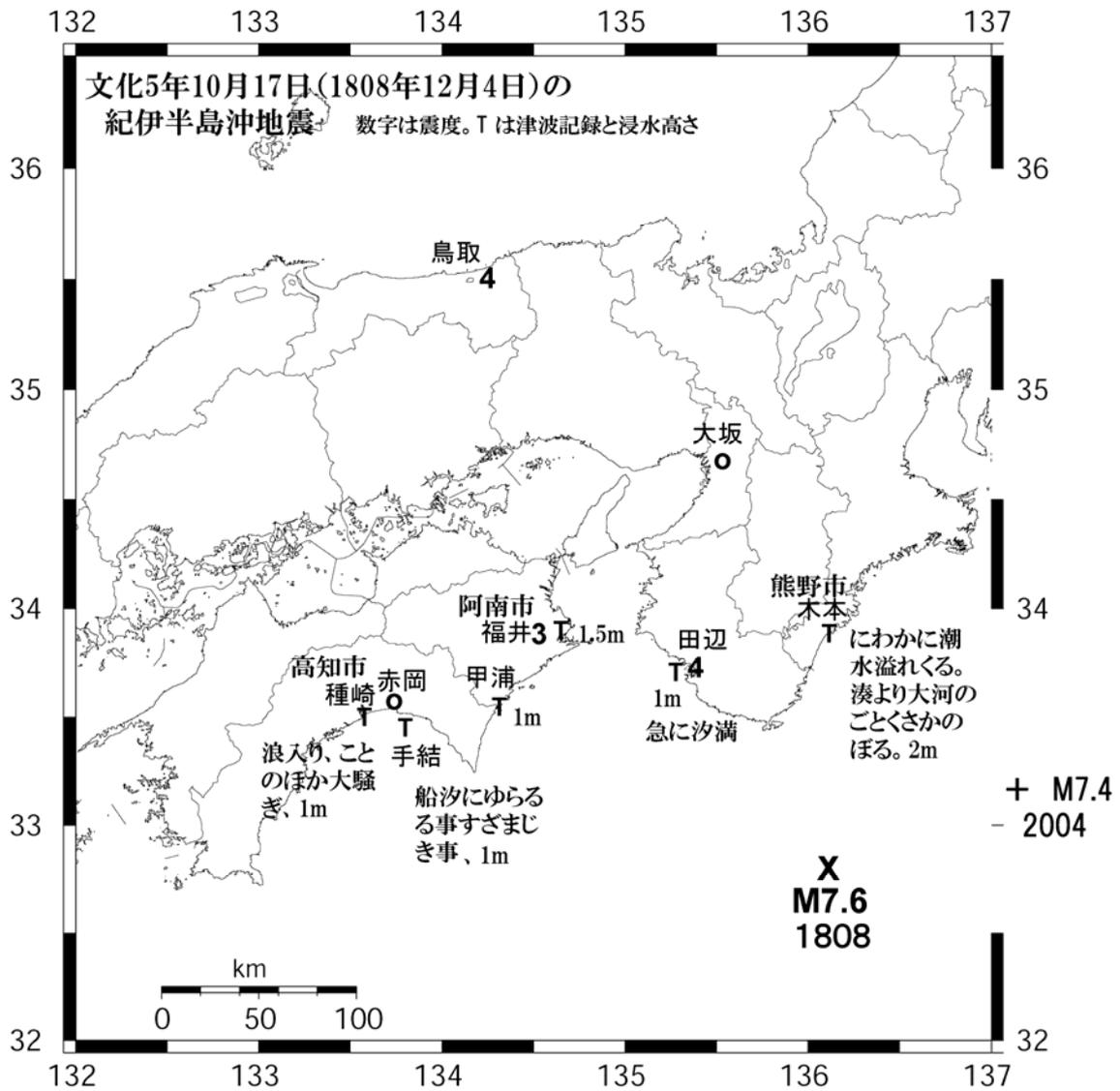


図1 文化九年十月十七日の地震・津波についての情報地図

数字は推定震度. 大坂・土佐赤岡の日記には十六日夜の地震しか書かれていない

×は 行谷・他(2004)の試算によるこの地震の震央

+は 2004年9月5日23:57頃の紀伊半島南東沖(東海道沖)地震(M7.4)の震央

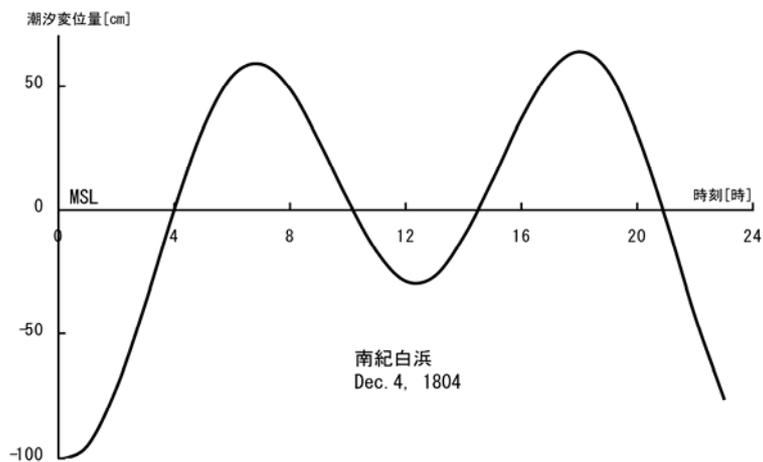


図2 南紀白浜における文化九年十月十七日(1804年12月4日)の潮位変化(計算天文潮位)

## 付録・文化五年十月十六日〜十七日地震・津波 全史料

◎一覧しやすいことを目的としたので、字体・段落は適当に改編した。  
二重丸印◎は、本論文筆者による注記である。

〔紀州田辺万代記 第十一巻〕〔『日本の歴史地震史料拾遺二』〕○和歌山県田辺市

◎田辺市教育委員会編 清文堂史料叢書 54 一九九三・三・三〇 清文堂発行 639pp.

一同十七日夜前四ツ過地震 九ツ時大二震 家々驚候処 七ツ過急ニ汐満 海近ハ汐入 引てハ指 引てハさし 五ツ比迄四度也、汐時ニテ無之ニ不審成事と寝候筋ハ無之候 大方外国ニ津波行 余浪ニても候ハん、新庄はま・敷・目良村など様々申出候

〔反古の綴〕地震第一輯十六巻四号昭和十九年四月 p.22 〔『新収日本地震史料第四巻』収録〕

◎紀伊南牟婁郡木本町 ◎（三）三重県熊野市木本 ◎昭和十七年八月 武者金吉・吉信英二採録

○同年十月十七日、晴天、海静ニシテ八ツ時潮干、卯(?)時俄ニ汐水溢来、湊より大河ノ如ク遡り、橋ノ下漲上り、忽引忽満、船漂蕩ス。日暮弥甚敷、終夜指引止マス、当浦人民終夜不寝、守り居、諸道具片付逃用意致、漸ニ番鷄比静り、翌十八日モ少々指引、アレテ不静

〔隠見雑日記〕〔『新収日本地震史料第四巻』に収録〕○高知県香美郡赤岡町

土佐群書集成(第四十四巻)山中駒吉記 隠見雑日記 寺石正路抄編 p.95

編纂者 高知地方史研究会 発行者 高知市立市民図書館 昭和五十二年十月十日発行

◎著者は土佐赤岡の豪商。高知にも邸宅を構えていたが、十月の記事は赤岡での記録と推定される。

天災

文化五戊辰、二月四日晴天風晝八時地震

六日夜ニ入り四ツ時地震

同 五 十月十六日当夜四ツ時地震

十七日朝曇当日手結ノ湊へ鈴波入り引汐之時湊ノ舟其汐ニ

ゆらるる事物すざましき事

二十三日巳前の地震甲浦種崎杯浪入殊外大騒

二十八日大雪(下略)

〔因府年表〕〔増訂大日本地震史料第三巻〕p.173. ◎鳥取(因幡の府)

◎岡嶋正義著 ◎『鳥取県史第七卷近世資料』一九七六 鳥取県 1095pp

十六日亥刻地震、丑刻又動揺す、以前よりも甚し

〔日録〕○大阪〔『新収日本地震史料第四巻』p.290〕〔三井文庫〕

十月十六日 天気 夜四ツ時地震

◎豪商三井家の日記。大坂における本拠地は高麗橋一丁目にあった。

〔阿南市史 第二卷(近世編)〕\*平成七年六月一日 徳島県阿南市発行 p.381

(三)地震と津波

徳島県沿岸で、近世に地震と津波によって災害が発生したのは……(中略)……

また、被害はないが、記録があるのは、文化五年(一八〇八)十月十七日及び安政二年(一八五五)十月十四日の地震である。『福井村誌』の「天変地異」の中に、文化五年の地震について「十月十七日地震潮五尺高く来る」とあるが、他地域には記録がない。局地的なものかと思われる。「北谷繁蔵記録」によると、「讃州大地震津波、阿波に而ハ地震少々也。橋浦浪二尺湊二而ハ三尺餘浪ある、朝より晚迄浪来りつづく。」との記事がみられる。

以下、被災記録をあげると、次のように記されている。(下略)

◎歴史地震研究会の講演の際は、「北谷繁蔵記録」以下も文化五年の記述かと誤解しておりましたが、阿南工業高等専門学校の島田富美男先生から「北谷繁蔵記録」のコピーをお送りいただき、現地でも調査を行った結果、「安政二年十月十七日」の記録として書かれていることが分りましたので、お詫びして訂正いたします。

なお、「阿南市史第二巻」のこの記述も実は間違いで、「北谷繁蔵記録」「阿南市史史料編(近世)、阿南市史編さん委員会編集、平成元年三月一日阿南市発行所収」によれば安政二年十月廿四日の出来事である。しかし、この記述も又疑問で、この日に大地震があったという記録は他書に見えない。後年「北谷繁蔵記録」が執筆された際に安政二年九月二十八日の安政東海く南海地震の最大級余震や安政四年八月二十五日の芸予地震の記録や記憶などが入り混じったのではと疑われる。

〔徳島県那賀郡福井村誌〕 \*徳島県阿南市福井町 p.144

◎福井村誌編集委員会編集・発行 昭和三十一年三月三十一日発行 発行者 原田一二

天変地異

- 一、寛政元年四月十七日地震六月早魃(中略)九月三日より六日迄出水
- 一、文化五年閏六月大風損家倒木あり十月十七日地震潮五尺高く来る
- 一、文化八年六月早魃大宮住持明神山へ雨乞に上る。佐藤順左衛門地田横を土手に薪水道樋木据付け故障起る。又小谷川新堰を設け中内より指留める
- 一、文化十三年八月大風大水大潮にて船舶疼あり (下略)

〔増訂大日本地震史料 第三巻〕 p.173

文化五年閏六月十七日(西暦一八〇八・八・八) 阿波國那智郡地震ヒ津波ヲ伴ヘリ、

〔福井村誌〕○阿波那賀郡

文化五年閏十月○大カ 十七日地震、潮五尺高く来る

(武者註) 文化五年ハ六月閏ナリ

◎右の記述が、「閏」の下の中間十一字が抜けてしまったための「事故」であることは明らかである。「福井村誌」は、『田所眉東著 福井村誌』(昭和五年刊)と思われるが、未見のため、原本の誤りか『増訂大日本地震史料』収録の際のミスかは分からない。